

# 川面義雄旧蔵原三溪書簡を読む—— 『三溪帖』『余技』『三溪画集』編纂と晩年の文化人交流

柏木智雄

はじめに

横浜美術館は、木版画家、古画の木版複製技術者として優れた業績を残した川面義雄旧蔵の資料群を平成二十七年より継続的に調査する機会を得た。これらの資料群は、主に川面の手になる版画や川面に宛てた膨大な書簡等によって構成され、今なお、その調査は継続している。一方、読解を終え概ね調査が終了した書簡群を、順次、ご所蔵者のご芳心を賜り収蔵してきた。本稿では、その書簡群の内、原三溪の新出書簡九十六通を翻刻する。

## 川面義雄とその旧蔵資料

川面義雄については、『日本美術年鑑』（昭和三十九年版）をはじめとして、いくつかの人名辞典にその履歴が抄録されている。また、川面自身による回想録<sup>1)</sup>の他に、まとまった伝記として、川面の弟子を自認した木版画家・舟橋満による私家版の著述<sup>2)</sup>がある。同書には、主として川面が東京美術学校を卒業してから後の実績が、様々な挿話を交えてまとめられてある。

それらによれば、川面義雄は明治十三年四月十七日、大分県宇佐郡院内村字小坂で、父庸三、母もとの下に生まれた。酒造を生業とし江戸時代には庄屋も務めた家系であったが、家業は父の代で廃れたという。叔父には神道家の川面凡児、立志小説家の堀内文磨（新泉）があり、その叔父とともに上京し、苦学して東京美術学校日本画科に入学、明治三十七年四月に同校を卒業した。その後、審美書院に複製模写の技術者として入社し、『浮世絵派画集』（明治四十年十一月）『東洋美術大観』（同四十一年八月）などの製作や《伴大納言絵巻》（国宝、出光美術館）の模写に従事し、後年、『源氏物語絵巻』（国宝、徳川黎明会徳川美術館）、単庵智伝《鸛図》（東京国立博物館）、《扇面古写経》（国宝、大阪・四天王寺）など、様々な系統の古画を技巧を尽くした着色木版によって模刻複製した。とりわけ、『源氏物語絵巻』の木版複製については、舟橋も前掲書において紙幅を割いて詳述している。困難を極めたこの複製事業は、源氏物語千年紀を機に詳しく検証された<sup>3)</sup>。

こうして、古画の複製木版技術の第一人者として斯界の評価を確かなものとした川面は、原富太郎（号・三溪、慶応四年〜昭和十四年）をはじめとして、その三溪とも親交を結んでいた美術史家の矢代幸雄、古筆研究者の田中親美、実業家にして茶人・美術品蒐集家でもあった高橋義雄（箒庵）ら多くの文化

人と親しく交際した。

昭和三十八年、川面義雄は『源氏物語絵巻』の木版複製全四巻の完成をみて、その一ヶ月後に逝去した。その後、ほどなく弟子の舟橋満が川面の遺品を整理し、これを川面の叔父・堀内文麿の息、すなわち川面の従兄弟にあたる堀内道男に托した。その後二代にわたって、これらの資料群は堀内家に保管されてきた。

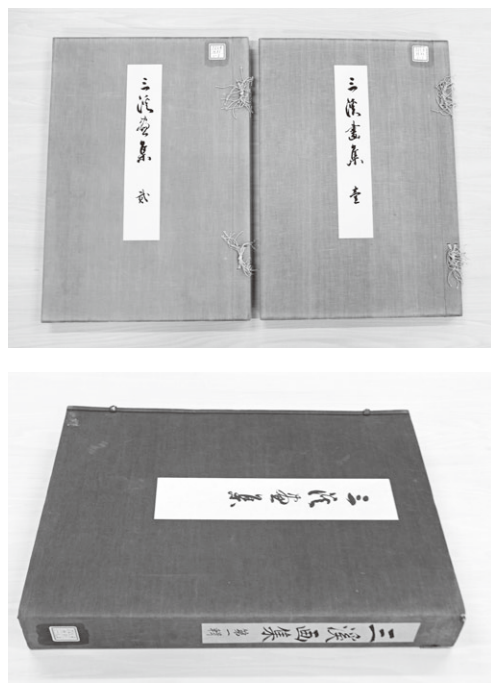
### 原三溪と川面義雄 『三溪帖』と『余技』『三溪画集』

川面義雄が、横浜の実業家・原富太郎の知遇を得たのは、舟橋の前掲書によれば、川面の審美書院時代に遡るといふ。明治三十年代末から四十年代初めの頃であろうか。原三溪が、古美術だけではなく新進美術家の作品蒐集にも着手し、下村観山など画才豊かな日本画家を庇護し始めた頃にあたる。川面は、明治四十二、三年頃、三溪の囑に応じて、三溪園の臨春閣住之江の間の襖絵四枚を肉筆で補完制作しており、早くから三溪の信頼篤かったものと思われる。

川面の人品技量を認めた三溪は、家蔵の古美術名品を編集集成して自解を付し印刷頒布する計画を樹て、製作を川面が所属した美術書肆、審美書院に託した。その発企は大正初年の頃であったと推測される。藤本實也が著した浩瀚な『原三溪翁伝』<sup>〔四〕</sup>には、「あれは私が依頼されてから十年間も苦心して工夫したものである尤も誠に惜しいことだと今でも諦め難い遺憾千万のことです」という川面の述懐を採録してある。その言葉の通り、今日『三溪帖』の名称で知られるこの豪華本は、三溪自ら巨費を投じ手間をかけて完成する

も、頒布を目前にして大正十二年の関東大震災ですべて烏有に帰したとされる。しかしながら、舟橋の前掲書には、「後日、川面さんは、この三溪帖を一冊にする以外に、二、三枚位取って置いたのを、一冊の帖に仕立てて、これを原家に届けた。三溪帖は原家にこの一冊か、二冊位しか無いのだ」とあり、三溪帖の異本の伝存が示唆されている。三溪帖が、三溪自身の美意識を具現し、その美術史観を披瀝するものであれば、この異本の調査と三溪が書いた自解草稿の比較分析、そして三溪帖そのものの再現は、三溪研究の基礎的作業のひとつに位置付けられるべきである。

この三溪帖とともに、原三溪の古美術研究の特色を示すものに、家蔵美術品の中から作品を自選し編集した『余技』がある。川面を校正者に迎え、昭和十三年に大塚巧藝社の印刷で成ったこの豪華本には、書画を本道としない古人による、謂わば素人芸ともいふべき余技の厳選された秀作四十一図が、

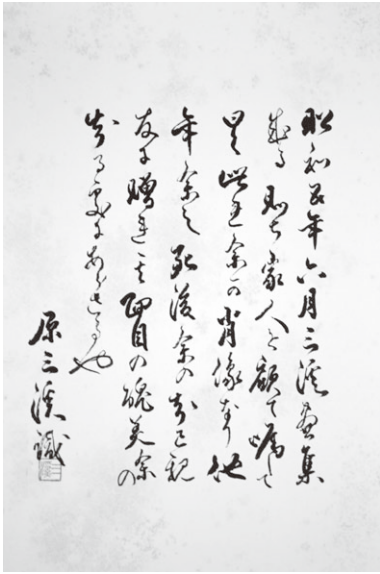


挿図1  
『三溪画集』(第一輯第一冊、第二冊)及び帙

三溪自身の要を得た寸評とともに収載されており、三溪の鑑識眼と美術品蒐集における着眼を読み取ることができる。

そして、藤本實也が前掲『原三溪翁伝』において「按ずるに翁が絵事に関する業績の総決算」と位置付けたのが、『三溪画集』〔挿図1〕の編纂頒布であった。昭和五年六月に完成した第一輯二冊、同十二年二月に完成した第二輯二冊および第三輯一冊、そして三溪没後の同十五年八月に嗣子良三郎の序文を伴って成った第四輯一冊、全六冊の豪華本で、製作担任者・川面義雄、着色印刷・錦泉社木版研究所、写真及印刷・大塚巧藝社、製本所・下嶋大完堂が、それぞれ任にあたった。晩年にいたって、謂わば自らの「余技」を顧みて集成し、美に奉じた自らの肖像をそこに留めようと企図したものと思しい。事実、第一輯一冊の自序に次のように記されている。

「昭和五年六月三溪画集成る則ち家人を顧て嘱して曰く此れ余か肖像なり他年余之死後余の知己親友に贈れ其面目の醜美余の知る処にあらざる也  
三溪識 三溪（朱文方印）」〔挿図2〕



挿図2 『三溪画集』（第一輯第一冊）三溪自序

また、第二輯第三冊および第三輯第五冊の跋文に「此画集の製作は総て親友川面義雄君の非常なる好意と努力とに由て成しもの也茲に深甚なる感謝の意を表す 昭和十二年春 原三溪」と誌し、製作の実務に従事した川面の多年の労と功績を鄭重な謝辞で報いている。

### 三溪の書簡

ここに翻刻する三溪の書簡九十六通は、すべて川面義雄に宛てた私信であり、執筆年月日は葉書または封筒に残された消印の判読と本文または封筒に記された日付により特定・推定した。大正六年十一月の日付を持つ封書（書簡番号1）は、長男善一郎の婚儀に伴う引出物の印刷送付状であるが、それ以外の書簡はすべて直筆で、毛筆または鉛筆で書かれている。昭和二年から三溪最晩年の同十三年にいたる十二年間に執筆投函されており、別表1にも明らかなように、昭和六年および同十一年、十二年の書簡がより多く残る。これは、『三溪画集』『余技』が成った時期と重なる。尚、十三通については情報を欠き執筆年を特定できないが、本文の内容に鑑み、おそらく上記十二年間に執筆されたものと推測される。書簡は、その用件から概ね表のように分類できるだろう。

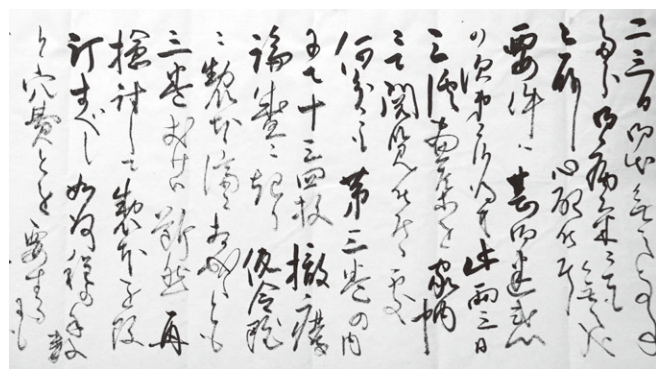
用件	書簡番号
自作所感、制作報告	63・2 64・4 65・17 68・18 84・26 92・32 95・36 96・38
撮影印刷依頼、納品所感	86・2 87・3 88・5 89・7 90・12 93・44 94・45 95・67 73 74 80 81 85

画集細評・所感	8・10・11・37・56・57・67・73・76・78・94
家藏品・古画所感	4・39・91
観劇案内	33・42・45・79・82・83
茶会案内	14・24・25・29・30・50・77
病氣見舞、病状報告	3・7・8・23・25・26・27・54・81・82・92
自邸・別邸等招待、往訪	65・41・24・6・66・43・25・9・69・44・26・10・70・46・27・11・71・47・28・13・72・52・29・15・75・53・30・16・76・55・31・17・77・58・34・18・78・59・35・19・93・60・36・20・62・39・21・63・40・22・

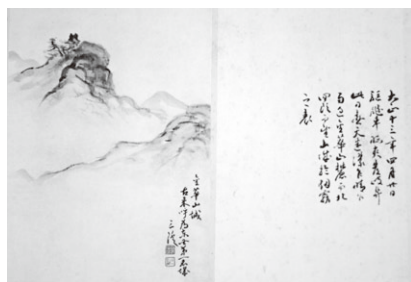
言及される人物については、家蔵古美術の書画家や観劇にかかる役者を除き、別表2にある四十五名を列記できる。若年期に三溪の庇護を得て大成し、既に斯界に地歩を固めた日本画家や、親しく交際していた美術史家や思想家、当代の数寄者・茶人「五」、政財界の名士が認められ、三溪晩年を特徴付ける人脈の広がりが見られる。

書簡文中において、「三溪帖」(書簡番号6・48・56・57)「画集」(書簡番号7・76・89)「三溪集」(書簡番号10・94)「三溪画集」(書簡番号67)とあるのは、いずれも『三溪画集』を指しているものと思われる。『余技』についても、「余技」または「余技帖」の呼称で数通(書簡番号37、78、80、81)に言及される。中には、「写真には甚不満に御座候」「朝夕不愉快に付き、何卒至急御改め奉願上候」(書簡番号5)「此画三日、三溪画集を家内中にて閲覧仕居候処、何分にも第三卷の内にて、十三、四枚撤廢論盛に起り、仮令既に製本済に相成候とも、三卷丈は、断然再検討して製本を改訂すべし、如何程の手数と冗費とを要するにもせよ、百年の悔を残すは不得策なりとの意

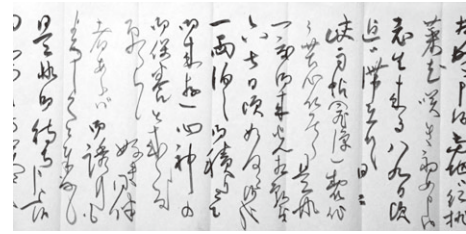
見多く、小生も大に軟化仕候次第に候」(書簡番号67〔挿図3〕)といった、印刷や写真の出来に対する厳しい見解や注文も示され、画集編纂に対する三溪の厳格にして真摯な姿勢をうかがうことができる。一方、例えば『三溪画集』所載の《峡雨帖》〔挿図4〕や墨画の大作である《龍虎》屏風などについては、朋輩の助言を得つつ制作に勤しむも、難渋し苦慮する心情が吐露されている(書簡番号58〔挿図5〕・61・63・64)。三溪にとって自作の制作は、「余技」に他ならぬものであつたにせよ、そこに決して妥協はない。



挿図3 書簡番号67



挿図4 原三溪《峡雨帖》其二



挿図5 書簡番号58

## おわりに

謹直な書風と文語体で記された一連の三溪書簡は、我々の今日的な読書慣習に照らして読みやすいとは言いがたいかもしれないが、決して難解極まりない質のものではない。身辺瑣事の報告も含め頻々に行われたと思しい文通そのものの在り方とあわせて、漢籍の素養を背景に持つ明治・大正・昭和戦前期に生きた教養人、数寄者の文化的生活と交際の実状を、この書簡群から知ることが出来る。

川面義雄旧蔵の資料に含まれる書簡は、この三溪の手になるもの他に、高橋義雄（箒庵）、矢代幸雄、田中親美、小林古径から送付されたものも含まれる。それらも機を得て順次翻刻し、向後の研究に資したい。

## 註

- 一、川面義雄「木版複製にかけた一生―《源氏絵巻川面版》作者の回想―」『芸術新潮』第十卷第十号、昭和三十四年十月。
- 二、舟橋満『木版画王 川面義雄』昭和五十三年、講談社出版サービセンター製作。
- 三、香山里絵「川面版源氏物語絵巻について」、徳川黎明会徳川美術館編『尾陽 徳川美術館論集 四号』平成二十年九月。
- 京都府京都文化博物館編、『源氏物語千年紀事業…雅の継承―源氏物語絵巻に挑む』（展覧会図録）、平成二十年。
- 四、三溪園保勝会、横浜市芸術文化振興財団編『原三溪翁伝』、平成二十一年、

## 思文閣出版

五、次の論文で、原三溪は近代数寄者の第三世代に分類され、本稿の別表2にも登場する茶人や数寄者の相関関係が解析されている。

齋藤康彦「近代数寄者の世代交代―第四世代の登場」『山梨大学教育人間科学部紀要』第十一卷、平成二十二年三月。

※成稿にあたり、堀内恒男様、堀内信子様より多大なるご助力を賜りました。

記して感謝申し上げます。

別表1：執筆年月日一覧

合計	年不詳	昭和13年	昭和12年	昭和11年	昭和10年	昭和9年	昭和8年	昭和7年	昭和6年	昭和5年	昭和4年	昭和3年	昭和2年	大正6年	執筆年元号
	n. d.	1938	1937	1936	1935	1934	1933	1932	1931	1930	1929	1928	1927	1917	西暦
	? 6 1 29 5、7、 7 1 28 12、 10 1 13 22 ? 2 15 23 ? 4 25 8、 ? 4 27 9、	1 12 2 10 3 11 12 13	12 10 8 4 1 16 15 12、3、15、 10 8 5 2 17 31 14 3、 10 9 5 2 20 4 22 11、 10 9 5 2 22 23 26 13、 11 10 6 3 30 6、3、2、 12 10 7 3 12、7、15 4、	10 3 1 3、21、20 11 5 (2通)、 24 3、 12 6 1 10 10 30 12 7 2 24 2、13 12 7 3 27 17 5、 8 3 11、6、	9 6、 9 9、 11 5、 11 23、 12 6、 12 19	1 12、 4 18、 5 11、 11 23、 12 6	7 29、 9 5、 10 4、 11 12	3 3、 3 11、 9 9、 12 21、 12、 29	10 1 14 20 10 2 24 27、 10 3 26 26、 11 7 7、6、 12 8 4 21、	5 13	3 29、 8 2	3 3	9 21	11 ?	執筆月日
96	13	5	25	17	6	5	4	5	10	1	2	1	1	1	数

別表2：人名一覧

高澤光子	関	鈴木達治 (煙洲)	西郷春子	小林古径	川崎克	風間	笠原	大塚稔 (鈍重)	仰木敬一郎 (魯堂)	井上治兵衛	伊丹信太郎 (揚山) カ	石井完	荒井寛方	梶治朗	固有名
38	79	73	14、 29	57 25 10、 66 30 19、 77 53 20、 84 55 21、 56 24、	32	52	45	92 5、 36、 67、 71、 87、	63、 75	86	12、 25、 36	37	6	71 53 4、 84 59 14、 63 21、 65 36、 66 43、	書簡番号
不詳。	不詳。	横浜高等工業高校(現横浜国立大学)初代校長。明治4年(1871)～昭和36年(1961)。	三溪長女。	昭和32年(1957)。 日本画家。明治16年(1883)～昭和32年(1957)。	政治家。明治13年(1880)～昭和24年(1949)。	不詳。	不詳。	大塚巧藝社社長。明治21年(1888)～昭和26年(1951)。	茶人、建築家。文久3年(1863年)～昭和16年(1941)。弟、木工家仰木政斎。	丸石製菓社長。明治11年(1878)～没年不明。	大和屋(道具商)。	不詳。	日本画家。明治11年(1878)～昭和20年(1945)。	美術家。明治30年(1897)～昭和57年(1982)。	備考

速水御舟	長谷川	橋本静水	野村	中村伯三	中村富次郎	中村	豊前	富田溪仙	徳富蘇峰	外狩顕章 (素心庵)	團琢磨 (狸山)	谷川徹三	田中親美	田中一松	高橋義雄 (箒庵)
20、 21、 24、 25、 34	11、 84	6	85	37	50、 68	5、 36、 65、 75	65	32	73	36	1	73、 74	57、36、4、 63、50、14、 65、51、18、 71、52、21、 75、53、22	39、 40	14、 16、 50
昭和10年 (1935)。 日本画家。明治27年 (1894)。	不詳。	昭和18年 (1943)。 日本画家。明治9年 (1876)。	実業家、野村洋三カ。	不詳。	古美術商。	不詳。実業家、中村房次郎カ。	不詳。	昭和11年 (1936)。 日本画家。明治12年 (1879)。	3) 評論家、思想家。文久3年 (1863)。 昭和32年 (1957)。	美術評論家。明治26年 (1893)。 昭和19年 (1944)。	5年(1858) 昭和7年 (1932)。 実業家。三井合名会社理事長。安政5年(1858)。	哲学者。政法大学総長。28年 (1895)。 平成元年(1989)。	古筆研究家。明治8年 (1875)。 昭和50年 (1975)。	983)。 明治28年(1895) 昭和58年 (1983)。 美術史家。東京国立文化財研究所長。	実業家、茶人。文久元年 (1861)。 昭和12年 (1937)。

和辻哲郎	和田幹男	脇本十九郎 (楽之軒)	安田靉彦	矢代幸雄	森川勘一郎 (如春)	桃井	本山	南	松永安左衛門 (耳庵)	益田孝 (鈍翁)	前田青邨	原善一郎	原
29、 73、 74	38、 96	52、 73	8、 24、 25	10、 11	4、 13、 62、 93	79	73	75	75	7、 87、 92	24、 25、 66、 77	1	79
9) 哲学者、思想家。明治22年 (1889) 昭和35年 (1960)。	和田維四郎息。精藝社社長。	昭和38年 (1963)。 美術史家。明治16年 (1883)。	昭和53年 (1978)。 日本画家。明治17年 (1884)。	昭和50年 (1975)。 美術史家。明治23年 (1890)。	87) 古筆研究家、茶人。明治25年 (1887) 昭和55年 (1980)。	三溪執事カ。	不詳。	不詳。	実業家、政治家、茶人。明治8年 (1875) 昭和46年 (1971)。	38)。 実業家、茶人。三井物産社長。嘉永元年 (1848) 昭和13年 (1938)。	昭和52年 (1977)。 日本画家。明治18年 (1885)。	昭和12年 (1937)。 三溪長男。明治25年 (1892)。	三溪次男、良三郎カ。

## 凡例

一、本稿は、原富太郎（三溪）が川面義雄宛に送付した書簡九十六通を翻刻したものである。

一、各書簡について、以下の順番で情報が記されている。「書簡番号」「執筆年（月日）」「材質（形状）」「封筒（葉書）表の記事」「封筒（葉書）裏の記事」「本文」

一、書簡は、執筆年月日の順序で掲載されている。執筆年不詳の書簡十三通は、末尾に順不同で掲載した。

一、翻刻にあたっては原本にあたり、読解の便を考慮して、原本の体裁を尊重しつつ以下のように改めた。

① 紙幅の都合により本書の形状による改行等については原則として追込みとした。

② 固有名詞や明らかな意図をもって使用されている旧字体以外は、原則として新字体に改めた。算用数字は「拾」「廿」「卅」を除き、「壹」を「一」、「弍」を「二」として新字体とした。また、異体字をそのまま用いた場合がある。

③ 変体仮名は平仮名に改めた。

④ 原本の抹消部分は、該当箇所左側に「」で示し、抹消箇所訂正がある場合は、左側に「」で示すとともに、右側に訂正の字句を記した。

⑤ 加筆・挿入文字は、その文言を「」で括った。

⑥ 再読文字は漢字を「々」、片仮名を「ヽ・ヾ」、平仮名を「、・ヰ」、二文字続きは「くく」とした。

⑦ 本文中に誤字、脱字、意味不明な文字がある場合、「ママ」「カ」など行間へ注釈を付記した。

⑧ 判読できない箇所、闕字となっている箇所は、字数が判明する場合は□□□で示し、字数が判明しない場合は□□□□□□などをもって示した。

⑨ 編者が加えた注は「」で示した。

⑩ 適宜、必要最小限の読点や句点を付した。

## 翻刻

1. 大正六年十一月 印刷（封書）

【表】川面義雄様 【裏】原富太郎

恭啓仕候。今般、善一郎義、團琢磨四女壽枝子と結婚仕候節は、御鄭重なる御祝物拝受仕、御芳情厚く御礼申上候。就ては、右御披露之為め、粗糞差上可申之処、乍略儀微品拝晋仕候。御笑留被成下候は、本懐之至に奉存候。敬具  
大正六年十一月□日 原富太郎

川面義雄様

2. 昭和二年九月二十一日 鉛筆、紙（封書）

【表】東京市本郷区千駄木町五〇 川面義雄様 惠展 【裏】横浜原三溪 九月二十一日

拝啓仕候。御画面拝見仕候。扱、竹生嶋新作は夜業にて書き候得共、御気に入り可申哉否哉と存居候。本月末には表装出来可仕候。比叡山もあまり表装



くるひ居候間、更に表装を直しに遣し置候。写真は可成長きもの「二尺位」  
宜敷存候得共、只今の処、近江八景を八葉宛、則ち八十六枚写し度候。此は  
つや消しの写真に願度候。写真屋は遠方を御伴れ被下候はずとも、当方より  
軸物のみを持参せは、其方都合よろしくと存候。且又、写真は八枚写して此  
を八組<sup>レ</sup>複製するに、何程の費用を要するものなるや、一寸御知らせ奉願上  
候。就拝顔可申上候。早々

九月二十一日 三溪

川面老台

3. 昭和三年三月三日 紙本墨書（封書）

【表】東京 橋区新肴町 審美書院内 川面義雄様 親展 【裏】横浜原三溪

三月三日

拝啓仕候。陳は以御蔭小生も遂に快復仕候間、安神奉願上候。柿画は大抵廿  
日越の通に御座候。尚、多少の新加入はあるへき事に御座候得共、目下は如  
右に御座候。其内、御都合次第にて彩色写しに御出被成下度候。草々

三月三日 三溪

川面様

【同封別書】

光琳図扇の蕨、光悦巻物月に萩 箱は中止に承居候、宗達佐野わたり、文晁  
山水、大燈国師書此は或は木版に願ふやも図られず候、木彫仏像、乾漆蓮花「此  
は尚一度御相談の上の事」、篠山羅漢、具慶洛中洛外、以上九点写真版、外  
に後鳥羽院附属書二枚  
木版之部

後鳥羽院、光琳図扇紅葉、光悦巻物松、光琳伊勢物語 二、乾山みだれ盃 二、  
妙聡大師書

4. 昭和四年三月二十九日 紙本墨書（封書）

【表】東京市本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 惠展 【裏】伊豆南風村  
庄 原三溪 三月廿九日

恭啓仕候。此頃は遠路御来賀奉謝候。竹田一楽帖、拜手仕候。兎に角も竹田  
の最大傑作の事とて、韻致到底企及すへからざるもの有之、嘆服仕候。竹田  
は大作には甚悪画多く候得共、此帖の如き船画小戯帖の如きは、実に古今独  
歩と可申候。老台印尉之技物、実に敬服之外無之候。木版を以て如此き原本  
の韻致を表す事は、此又実に竹田以上の技能と推服限りなく候。諸大家の評  
を聞き、三溪老生も翌朝一、二葉相認め申候。一指頭（布袋）と申す画と踊  
布袋とを相認め申候。幸に田中君之賞賛を得て、同君の所望にて泉君に寄贈  
仕候。踊布袋は森川氏に進上仕候。未だ余は参り不申候。兎に角も大画の題  
目の下に、別に一匠境を得しかと自分にも心中相喜ひ申候。是非、田中氏訪問、  
御一覽御批評奉願上候。目下、又一、二快心之作を得申候。其内御批評を請  
ふ時も可有候と存候。先は御礼旁申上候。早々頓首

三月廿九日 三溪

川面老兄

一楽帖に云ふ如く、竹田は唯一の山湯を友とせしのみ候。小生は、老兄始  
め三、四の知己を有する事を、またなき幸福と存候。

5. 昭和四年八月二日 紙本墨書(封書)

【表】東京市本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 惠展 【裏】横浜原三溪  
八月二日

拝啓仕候。残暑甚敷候。御健勝之御事に奉存候。扱、其後中村氏の分、其外  
多少は御撮影被下候哉、御伺申上候。中村、尚、遷延仕候様なれば、小生方  
より更に督促可仕候。一寸御通知奉願上候。過日も申上候通り、大塚氏は知己  
には相違無之候得共、写真には甚不満に御座候。過日之分は、大半黒色に過  
き不愉快に御座候。再度眼に触る、毎に不愉快に候間、向後此様之事なき様堅  
く御注意願度、尚、只今の内、左記の分は、可成焼き直し御改訂被下度願上候。

一、夕顔棚 一、山中温泉 一、飛州雨中山水 此も少々黒し

一、水仙 一、寒江独釣山水 一、三溪野老と語る

一、矢走 地色白すぎる 一、箱根画帖四枚とも黒過る

右は無駄の様に候得共、朝夕不愉快に付き、何卒至急御改め奉願上候。尚、  
尊兄、御所持之分も残余御写し奉願上候。早々拝具

八月二日 三溪

川面尊台

6. 昭和五年カ五月十三日 紙本墨書(封書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 親展 【裏】五月十三日

原三溪

拝啓仕候。陳は来る十八日日曜日には午前より、橋本静水、荒井寛方両人と  
参候間、貴君にも御来会奉願候。尤、三溪帖上巻も御序に御持参御願申度候。  
両氏は十時頃迄に来談のよしに候。右御通知迄に申上候。草々

十三日 三溪

川面老兄

7. 昭和六年一月二十日 紙本墨書(封書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 親展 【裏】一月廿日 横  
浜本牧町 原富太郎

恭啓仕候。其後、御病氣如何に候哉。当時、風邪流行上、容易に快復不仕候  
内にて心配仕居候。精々御精養奉願候。扱、御尽力願候画集の代金、此頃中  
御来駕之節、差上可申存居候為め、延り仕候得共、あまり延りに付、兎に角  
差出可申候。御申越には原価の二割五分との御申出には候得共、せめて三割  
丈御取置願度、此様のもの五割にても七割にても、尚、甚安き事と存候得共、  
兎に角も前記の計算にて、一時御査取置被下度奉願候。則ち金二千百五十八  
円の小切手、封入仕候。御落手奉願候。余は拝顔之上可申候。早々  
一月廿日 原三溪

川面老兄

御全快次第、一度御来遊奉待候。鈍翁の一日の巻も大略完成仕候。

〔別紙〕

製本総原価

一金九千三百五拾二円也

此三割

金二千八百〇六円也

内

金六百四十八円也 御預け分

差引

金二千五百拾八円也

御落手被下度候也

8. 昭和六年二月二十七日 紙本墨書(封書)

【表】東京本郷区駒込千駄木五〇 川面義雄様 親展 【裏】横浜 原三溪  
二月廿七日

恭啓仕候。陳は春寒尚難去候。御障りも無之候哉。過日、御手紙拜手仕候。尚、御病床に御座候哉とも被存候。只の流行風邪とのみ存居候処、今に御外出無之候ては聊か気にかゝり申候。大体、御病氣之経過、又は御病症など御洩し被下問敷候哉。勿論、御書面は御自筆と存候間、御病床に御平臥中とも存不申候。さりとて二ヶ月も経過致候ても御全快なきは、此又想像にあまり申候。兎角は、老生、天下の第一の知己に春来一度も快談の機なきは、寂敷限りに有之候。其為めと申にもあらされとも、近来作品も無之候。扱又、其後一人の知己も得不申候。靱彦君より相当の細評参り候。其内御覧に入れ可申候。兎に角も、其後の御経過、御病症等、御知らせ奉願上候。先は御伺迄に。草々  
二月廿七日 三溪

川面老兄

小生、去る十八日より伊豆大嶋に遊び、三泊之上帰り申候。拝顔御細話可申候。

9. 昭和六年三月二十六日 紙本墨書(葉書)

【表】東京本郷区「駒込」千駄木町五〇番地 川面義雄様  
拝啓 今日長岡より帰り申候。三、四枚、出来仕候。是非老台の御批評願度候。

二十七日か二十八日、又御来車願度候。両日御差支なれば、二十九日二てもよろしく候。先は御願迄申上候。草々

二十六日夕 三溪

10. 昭和六年七月六日(消印は八月六日) 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 原三溪 【裏】七月六日  
陳は小生は本日より、一寸箱根蘆の湯、去来山房へ参り申候。尤も来る日曜日か火曜日には、一度帰港可仕候。万一御寸閑もあらは、土曜より一泊にて御来函如何哉。高山爽涼の氣に一夕を談する事は、一層御活動の資源と可相成候。勿論強てのぎには無之候。昨日矢代幸雄君に面会乞、同氏より三溪集の細評参る由に候。同君に、托鉢僧の画を送り申候。小林先生には、未だ御面会の形無之候哉と存候。○矢代君は、貴君の桐畑など賞め居り候。就れ細評参り次第、御覧に入れ可申候。  
七月六日 三溪

11. 昭和六年八月二十一日 鉛筆、紙(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 【裏】二十一日 原三溪  
陳は炎暑難堪候。来る日曜日には在宅仕候。午前御にても、御寸閑御来遊願度候。長谷川君の分、何とか乍御面倒、御問合願上度候。老台の錢泡風呂の画表装出来仕候。差上申度、就而は先の横物、御序に御持参御願申度候。今回一枚も出来不申候。矢代君の評、参り申候。格別敬服も不仕候得共、一、二至当と存候迄御座候。早々  
二十一日 三溪

川面老兒

ざる茶と雑談とに候。高橋君と従来の御関係も有之、御繰合せ願申候。

12. 昭和六年十月十四日 紙本墨書(封緘葉書)

15. 昭和六年十一月七日 紙本墨書(封書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇番地 川面義雄様 横浜 原三溪 【裏】十四日

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇番地 川面義雄様 恵展 【裏】十一月七日 横浜本牧町 原三溪

拝啓仕候。快晴、御同慶奉存候。伊丹氏よりの布袋、御写真相済候得は、何卒同人に御返し奉願候。此は表装取急き候為に候は、別筒御送り申候。滯筏の絵三葉、就れかよろしき哉迷ひ申候。何卒二葉之内就れかを御選択被下、写真御採り被下度、日曜日に御閑暇なれば、御持参被下候得は、夫にて宜敷候。此画は苦心するも其効莫無之候。明朝水郷に一遊仕度候。土曜晚か日曜午前には、必帰宅可仕候。何か画材可有之と存居候。早々

十一月七日  
御来駕被下度奉存じ候。長谷川君、三幅も表装出来仕候。外に写真未済の分も一幅御座候。よろしく願上候。先は右迄申上候。草々 拝具

十四日 三溪

川面老台 机下

川面様

13. 昭和六年十月二十四日 紙本墨書(葉書)

16. 昭和六年十二月四日 鉛筆、紙(葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五拾番地 川面義雄様 十月廿四日 三溪

【表】東京市本郷駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜

拝啓 明日曜に森川氏来遊之よし、此頃中同氏贈りし軸物表装出来仕候由にて、持参被致候よし、御寸暇なれば御来遊御待申上候。草々

拝啓 過日来、巖島、長崎、太宰府を経て、漸く本日帰宅仕候。午後箒庵老よりの二幅写真、未出来不申候哉。御出来なれば、来る日曜頃御持参願上度、御旅行中の話も有之候。早々

十二月四日 三溪

14. 昭和六年十月二十六日 紙本墨書(葉書)

17. 昭和七年三月三日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇番地 川面義雄様 十月廿六日 原三溪

【表】東京本郷駒込千駄木町五十 川面義雄様 三溪 【裏】三月三日

拝啓 明後廿八日十一時迄に、箒庵先生、田中親美先生、或は原君も御案候間、乍御迷惑、老台にも、是非御来会相願度候。西郷田舎家にて午餐と規則立た

陳は其後、絹地に蓮三枚、白鷺あをひ一枚、芙蓉も一枚書き申候。一度老台

の批評を請ひ、取捨を定め度思も有之候。乍御迷惑明晩にても明後晩にても、可成は夕方一、二時間前に御来車願度候。勿論御都合にて、午後何時にても早き方よろしく候。御願迄。草々

三日夕 三溪

18. 昭和七年三月十一日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷駒込千駄木町五〇 川面義雄様 十一日 三溪

陳は一昨朝より微恙臥床仕候。本日は大概全快仕候。此頃田中先生来訪、四枚絹地画批評有之候。来る日曜十三日御都合なれば、御来遊如何に候哉。其折御所持之蓮之幅、御持参相願度、是非一度書き直し掲載仕度存候。余は拝語之時を新に申し候。貴君の幅は前方の草が悪しくと存候。

十一日 三溪

19. 昭和七年九月九日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷駒込千駄木町五〇番地 川面義雄様 九月九日 三溪

拝啓 陳は来十一日、小林古径氏軸物持参之上、被参候由に付、御寸暇御来車願上候。表具師も釣りに出でざる様申付置候。画帖も今回は、御取極め被成度候。小林氏の来車は、午前なるか午後なるか判明不仕候。或は午後なるかとも存候。少し早く御来車願上候。木食巻、出来なれば御都合願候。

20. 昭和七年十二月二十一日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 親展 【裏】二十一日 横

浜 原三溪

恭啓仕候。陳は来る廿五日日曜日午後、御来車御願申上度候。当日は、小林、速水両画伯も御招き申置候。晚餐ホテルにて差上申度と存候間、老兄にも是非御来会御願申候。両画伯へは不申候得共、内実は此間の蓮花大幅の批評を乞ひ申度為めの野心に有之候。御馳走をして気がねもして絵を見て貰ふなど、扱々何方にも苦しき事は離れ不申候。一笑申候て奉存候。草々互

臘尾二十一日 三溪

川面老兄

御序に、木食翁、両君に御見せ被下候ては如何哉。

21. 昭和七年十二月二十九日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷駒込千駄木町五〇 川面義雄様 十二月廿九日 原三溪

年末相迫候。御多忙之事に奉存候。扱、明春長岡一会之ぎは、六日に田中氏を招き申候に付、七日に願度、小林、速水、県君と老兄と四人御同伴願度、汽車は八時二十五分東京発の汽車、十二時〇五分沼津着。夫より直ちに長岡行のバスか又は自動車にて御出願度、バスは一人六十銭、自動車も一台三円五十銭位にて格別の差無之候。七日は田中先生も滞在之事に存候。余り雨天なれば、順延にてよろしく候間、八日に願度候。尚、汽車切符は二等汽車差上申度候間、恐入候得共、老兄御立替被下、集合所を定め、右切符御渡し被下度奉願候。同夜は皆様御一泊の事に願度候。小林、速水両君へは小生よりも御返封申置候。県氏へも申上置候。小生は三十日か三十一日二長岡へ参り可申候。長岡電話は長岡二三に御座候。

22. 昭和八年七月二十九日 紙本墨書（葉書）

【表】東京本郷駒込千駄木町五〇番地 川面義雄様 横浜 原三溪

拝啓 陳は明朝、田中親美君、来遊有之候間、炎暑之折柄なから、是非明朝御来遊、御待申候。作品は無之候得共、旅行中の御話しなど申上度候。草々

23. 昭和八年九月五日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷駒込千駄木町五〇 川面義雄様 親展 【裏】九月五日 芦の湯 原三溪

御手紙難有奉存候。遂に快方、御蔭にて昨今は床の上にて横になれる位に成て居ります。二、三日内には床の上に乗る事位は出来ると思ひます。食物は、昨今半粥を喰へて居ます。今一週間も立ては固形物となると思ひます。今一週間も立ては、是非御遊びに御出を願ひます。院展などの御話も伺ひ度いと案て居ります。先は近状御報告迄申上ます。草々

九月五日 三溪

川面様

24. 昭和八年十月四日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇番 川面義雄様 【裏】十月四日 箱根強

羅白雲洞 原三溪

拝啓仕候。小生去る一日、白雲洞へ移り申候。以御蔭、日々軽快に相成申候。就而は来る九日、小林君、速水君、前田君、安田君と尊台五人様、御来遊を願ひ申度、小生今小林君へは尊台より御打合被下候哉旨申置候間、乍御手数宜敷願上候。速水君へ小林君今、御打合被下度旨申置候。前田君より安田君

へ御打合せ被下度旨申置候。同日十一時半頃迄に強羅着駅着位に願度候。可

成前田君にも打合せ御同行被下候得は、幸甚に奉願上候。皆様同夜御都合にて御一泊も不苦候間、此又御含置奉願上候。同日□、常の豪雨なれば翌日に延行可仕候。しかし大抵の事なれば決行可仕候。茶も差上度積りなれども、勿論三溪流にて六ヶ敷事は致不申、大胡坐横臥、広言放論、一切差かまひ無之事に候。早々

十月四日 三溪

川面老台

25. 昭和八年十一月十二日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 原三溪

拝啓 其後御病氣如何哉、御案し申上候。扱而来る十七日正午、蓮華院にて一会相催申度、余り秋色よろしく同人と共に秋を分つ事とて、外に寂味を共にする人、過日の同人の外に無之、夫故更に小林、前田、速水、安田の四君に申上候。貴君にも御加り願度、是非御繰合被下度奉願候。尚、伊丹氏写真は未だに候哉、小生より促催いたし候てもよろしく候。草々

十二日 三溪

26. 昭和九年一月十二日 紙本墨書（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様

拝啓 此頃中書房間にて勉強仕、数十葉相認申候。来る日曜日、何卒御来車被成下、御撰別相願度御待申候。小生以御蔭、大に快方に相向申候。乍末御安意奉願候。

一月十二日 三溪

27. 昭和九年四月十八日 紙本墨書（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 四月十八日 三溪

先日曜には御来車なき為め、万一御病気にもやと心配して居ります。花時は心を話度、何やら落付かず、其後更に筆も取りませんが、桜満開、二十二日には既に葉桜と思ひますが、御暇なれば御一遊願ひます。御待ち申ます。

28. 昭和九年五月十一日 紙本墨書（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五十 川面義雄様

恭啓 陳は小生、一昨九日帰宅仕候。明後日曜在宅仕候。御寸閑御来遊如何哉。今回は一葉も作品は無之候。草々

十一日 三溪

29. 昭和九年十一月二十三日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 貴下 【裏】十一月廿三日

日 横浜 原三溪

拝啓仕候。陳は来る廿五日日曜日に、和辻氏、蓮華院へ来遊、茶会之約有之候に付而は、何卒老兄にも御参会相願度、客は和辻君と老台、春子三人のみ。に御座候。御寸閑なれば十一時頃か十一時半頃迄に御車御願上候。先は右御案内迄に申上候。草々

二十三日 三溪

川面老兄

30. 昭和九年十二月六日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 十二月六日 【裏】三溪

拝啓 陳は来る九日日曜日に御茶差上申度候間、午前十一時半頃迄に御来駕御願申度、御差支無之候得は、何卒御承諾奉願候。当日、小林、速水の両画伯も来遊の事に相成居候。先は右御案内迄に申進候。草々 拝具

十二月六日 三溪

川面老兄

31. 昭和十年九月六日 紙本墨書（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 三溪

拝啓 陳は私事、去る三日帰宅仕居候。付然御閑なれば、「日曜に」御来遊如何に候哉。先は右迄々。草々

九月六日

32. 昭和十年九月九日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 平安 【裏】九月九日夕

横浜 原三溪

拝啓 陳は昨日は失礼仕候。本日川崎克氏より他の用事にて手紙参り、内々例の雲龍の画、富田溪仙氏より激賞の書面参り居候趣、記入有之候。富田溪仙とは意外に候得共、多少は共鳴の人も有之事に存候。奇聞に付、一寸御知らせ申上候。ドンナ事を書いて来たかを聞き度と存居候。御咲迄。草々

九月九日夕 三溪

川面老兄

33. 昭和十年十一月五日 紙本墨書(封書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 親展 【裏】十一月五日 横浜 原三溪

拝啓仕候。一昨日、一寸御噂申上候観劇之ぎ、来る十一日の切符、買取仕候に付、是非御同伴御願上度、当日午後四時十五分の十五分前位迄に、新橋停車場正面の切符調の迎に御待合せ願度候。御多忙とは存候得共、外に好都合の同伴者無之に付、何卒御繰合せ奉願候。小生は一両日中に箱根白雲洞に四、五日間、秋色を賞し度と存候。此も未だ確とは申上なく候得共、多分其積りに御座候。草々

十一月五日 三溪

川面大兄 梧右

四時開場に付、三時四十五分位迄々に新橋へ御待合せ被下度候。

34. 昭和十年十一月二十三日 紙本墨書(葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様

蓮華院之黄葉、見事に相成申候。明日曜御来遊如何に候哉。御待申上候。草々  
十一月廿三日 三溪

35. 昭和十年十二月六日 紙本墨書(葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 三溪

恭啓仕候。来る八日日曜、御来駕被下、白鶴、御批評願度、御待申上候。い  
つれ拝芝御細話可申候。

六日夕

36. 昭和十年十二月十九日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木五〇 川面義雄様 【裏】十二月十九日 恭啓 御尽力被下候竹鶴屏風、本日落成仕候。出来は不出来に候得共、御一覽被下度、明日大塚君と参候序手有之候間、撮影可仕候。来る日曜日には、田中、県の両君、伊丹君、外狩君、中村など忘年晩餐に招待仕置候。勿論老台御臨席を請ふ次第に候。夕方ホテルにて食事差上申べく候。午後何時にても夕方五時頃にても、御都合にて差支無之候。先は右迄。草々  
十九日 三溪

37. 昭和十一年一月二十日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 三溪 【裏】一月廿日 拝啓仕候。過日御噂申候余技藝術社は神田神保町に有之、中村伯三、石井完、高澤光子と申三人の名義に候。過日、余技は近々天下に発表する性質の者は無之、却而余技の特色を失ふものなれば賛成も不仕、作品の掲載も断る旨申遣し候処、更に三人より理由は御尤なれども経済的の援助は不受とするも、作品の掲載を拒絶せらるゝは、飽迄不合理なりと申来り居候。乍御迷惑、一度和田幹男に何等かの関係あるかを御問合せ願はれ問敷哉、此義御願申上候。草々

一月廿日 三溪

川面大兄

38. 昭和十一年一月二十日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 三溪



拝啓 陳は先刻書面差上申候際、書き落し申候。其件は孔雀の「尾」羽を広げた処の写生帖はドコカに御見当り無御座候哉奉伺候。動物館に写生に参り度候得共、孔雀が何時尾を広げるか分り不申候二付、此又困却仕居候。結局誰れか写生したるものを借り度と存候。何か御心当り無之哉奉伺候。草々  
一月廿日 三溪

39. 昭和十一年一月三十日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 【裏】一月卅日 原三溪  
拝啓 過日は御書面拝手仕候。難有奉存候。扱、来土曜日晴天なれば、午後一、二時頃に田中一松氏来邸、琳派の画幅、漆器見せ候事にいたし候。田中氏は鑑識有之人と存候。人格もよろしき人と存候。多分貴君も多少御知人かと存候。就而は、同日若し御都合出来候得は、雑談旁御来遊御待申居候。何卒御繰合せ被下度候。東劇も其内、御同伴願度候。  
一月卅日 三溪

40. 昭和十一年二月十三日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 三溪 【裏】十三日  
拝啓 陳は十五日午後、田中一松氏に琳派展覧之事、通知仕置候。多分来邸可有之存候間、何卒繰合せ御来車願上度候。三溪画も多少見せ可申哉とも存居候。万一同日、田中氏差支御座候様なれば、電報にて御知らせ可申上候。草々  
十三日 三溪

川面様

41. 昭和十一年三月五日 紙本墨書（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 三月五日 三溪  
恭啓仕候。陳は余寒甚敷候。御健勝之御事に奉存候。其後、五、六枚新作出来仕候間、来る日曜日御来遊御待申上候。帝展一覽仕候。拝顔之上、批評可申上候。草々

42. 昭和十一年三月六日（消印は四月六日） 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 親展 【裏】三月六日 横浜本牧町 原三溪  
拝啓 昨今、演劇熱、三溪園にも伝染仕候為め、今度の歌舞伎座へも、是非一同見物の議、持上り候為め、毎度東劇の御突合を願候。尊台も此際逸す可からざる好同伴と存候為め、来十三日の観覧券封入仕候。何卒当日三時に、歌舞伎座へ御出張願上度候。尤も十分位前に御着願度候。今回は三溪園同勢九人にて参り候間、停車場へは参り不申候。就れ拝顔之上、可申上候。草々  
三月六日 三溪

川面様

43. 昭和十一年カ三月二十一日 紙本墨書（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 三月廿一日 原三溪  
拝啓仕候。陳は梅花見頃に相成申候。明日曜に御来車如何に候哉奉待候。夕食に田楽にても焼き可申候。県氏は如何に候哉。御同伴被下候は、妙に御座候。草々

44. 昭和十一年五月三日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 三溪

恭啓仕候。陳は小生、明日より二、三日伊豆へ参り、六日頃帰宅可仕候。就

而は来週十日の日曜には幸に御寸閑御座候得は、御来車被成下度、其際例の

白鳩も御願申度と存候。先は右迄々申上候。草々

五月三日 三溪

川面様

45. 昭和十一年六月十日 鉛筆、紙(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 三溪 【裏】六月十日

陳は観劇の事、再度変更仕、申訳無之候。来る十六日と確定仕候。同日三時

半に新橋停車場にて御待合せ願度候。就れ拝顔之上可申候。近日笠原参上、二、

三枚撮影相願可申候。其前電話にて可申候。草々

六月十日 三溪

川面様

46. 昭和十一年七月二日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 三溪

拝啓仕候。連日之雨天、御同困之至に奉存候。来る五日日曜には在宅仕居候。

御寸閑なれば御来駕願上度、乍然、編纂之事も御相談仕度と存候。草々

七月二日 三溪

川面様

47. 昭和十一年七月十七日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 原三溪 【裏】七月

十七日

拝啓仕候。陳は天気快晴、御同慶之至に奉存候。来る日曜日、御寸閑なれば

御来車願度候。野尻湖及兎シヤガ表装出来仕候。御一覽願度候。先は右迄々

申し進候。草々

七月十七日 三溪

川面様

48. 昭和十一年八月十一日 鉛筆、紙(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 三溪

残暑甚敷候。御障無之候哉。尚、三溪帖之内、過日差出候三巻の末尾の内、

岡崎城産湯井書画二幅対有之候。右は何卒、一寸印刷御見合せ置被下候様奉

願候。小生、二、三日内に箱根白雲洞へ参り可申心組に御座候。草々

十一月 三溪

川面様

49. 昭和十一年十月三日 鉛筆、紙(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 原三溪 【裏】十月三日

拝啓仕候。昨日は御尊来奉謝候。颯風は無事通過、御同慶此事に御座候。扱、

先般改作仕候兎に桔梗す、きの画、再見仕候処、未だ面白からざる処有之候

に付き、最初近、更に改作試み可申候間、コロタイプ暫時此分を御見合せ願

上候。草々

十月三日 三溪

川面様

50. 昭和十一年十一月二十四日 紙本墨書(封書)

【表】〔東京〕本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 親展 【裏】十一月廿

四日夜 横浜本牧町 原三溪

拝啓仕候。陳は来る廿六日正午、高橋等庵老を茶会に招待仕候処、此際一通

り招待済に相成居候為め相客に窮し申候に付、誠に御迷惑御案し申上候得共、

同日正午に、今一度御列席願上度、殊に御願申上候。勿論田中君にも今一度、

御無理可相願心得に候外に、中村富にも列席を頼み可申存居候。恐入候得共、

御諾否、一寸電話にて本日中に御一報奉願候。草々拝具

十一月廿五日 三溪

川面様

51. 昭和十一年十二月十日 紙、鉛筆(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 三溪 【裏】十二月

十日夜

本日は御多忙中、態々、御来車奉謝候。御帰宅後、取調申候処、

田中君藏

房州山水の花畑の彩色、今一度、御取調奉願候。

水郷帖之内

右は二段に摺る事にして、

堤の牛一枚 十二橋一枚

与太浦一枚 鳥栖一枚

柳陰之家 書

此三枚を致しては如何のもの哉と存候。此外、白兔に秋草は更に書き直し可  
申候。草々

十二月十日夕 三溪

川面様

52. 昭和十一年十二月二十四日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 よこはま 原三溪 【裏】

十二月廿四日

拝啓仕候。陳は明廿五日午前中、多分十時頃と存候が、田中、脇本及風間三人、

支那画観賞之為め来遊仕候間、御差支無之候得は御来駕「被下度」。勿論歳

末切迫之折柄に付、態とは不申上候。且、品物は老兄には、既に「おなじ

みの品」のみに候間、何の珍らしき事無之候。只楽軒氏(ママ、楽之軒)に支

那画観せ申度迄の事に候。就れとも御都合にて御随意に願上度候。草々

53. 昭和十一年十二月二十七日 紙本墨書(封書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜本牧町 原三溪 【裏】

十二月廿七日

拝啓仕候。歳末切迫、御多端之事と奉存候。扱、来る一月六日、小林古径君

及県治朗君、南風別荘へ御来車之事に相成居候に付、貴君にも何卒御繰合御

同伴願上度候。両君へ御打合せ被下、汽車御同車被下度、沼津迄迎車差出置

可申候間、其前御着之時間一寸御通知願上度。電話は長岡二十二番に候。雨

天にても御来車之事に候。勿論一兩泊の予定にて、温泉に陶然たる味を耽る事に候。田中親美君も同道せらる、事かとも存候。老生は二十九日に長岡へ参り、彼の地にて新春を迎へ可申候。就れ来湯拝眉と斯申候。

二十七日 三溪

54. 昭和十二年一月十五日 紙、鉛筆（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 南風別荘 【裏】一月十五日 恭啓仕候。其後御病氣如何に御座候哉、御案し申上候。多分御全快相成申候事と遠察仕居候。時下嚴寒之折柄、精々御撰養奉願候。小生も以御蔭壯健、有閑仕居候。乍憚御休念奉願候。小生明十六日より四、五日、帰港可仕候。十七日は在宅仕居候。来客も無御座候。万一御用も御座候者、十七日なれば都合よろしく候。御用無之候得は、就れとも御都合にまかせ申候。先は御見舞旁、御伺まで申上候 草々

55. 昭和十二年二月三日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 南風別荘にて 原三溪 【裏】二月三日 肅啓 陳は小生其後、尚、長岡に滞在中に御座候。只今桜花綻び見頃と相成居申候。一度御来遊願度と存候。此は別に可申上候得共、来る十五日、小林画伯と共に築地錦水亭、午餐差上申度、夫より東劇見物に御同伴仕度、何卒御練合せ被下度奉願候。長岡一遊は、其前か或は後に御誘引申度、目下、梅花村莊を粧ひ申居、軽暖倍々適し申候。就れ五日、過に御打合せ可申候。

56. 昭和十二年二月十一日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 長岡南風別荘 原三溪 【裏】二月十一日夕

拝啓 陳は小生は明十二日午後帰宅仕、十三日は来客御座候得共、十四日の日曜は在宅仕居候。乍然、三溪帖の御用向等も御座候様なれば、十四日は差支無之候。十五日には小林君も来会之よしに候間、十二時頃に新橋にても御待合せ願度と存候。就れ御打合せ可申上候。草々

57. 昭和十二年二月十三日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜本牧町 原三溪 【裏】二月十三日 拝啓 陳は昨夕帰宅仕候。明日曜には天気よろしく候得は、文部省より田中氏始め十時頃四、五人参るかもしれず候得共、午後二、三時頃なれば、何等差支無之候「間」、三溪帖の事も何度候間、御寸閑なれば、可成御来駕御願申度候。又、明後十五日には正十二時迄に、新橋停車場にて御待合せ願上度、小林君も同時御待合せの事に相成居申候。先右迄々。草々

58. 昭和十二年三月二日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 親展 【裏】三月二日 横濱長岡にて 原三溪 拝啓仕候。逐日春光相加へ申候。当地は紅桃葉花咲き初め申候。老生来る八、九日頃迄は滞在仕候。日々、峡雨帖（飛驒）製作に苦心仕居候。是非一度御来光相願度、六、七日頃如何に候哉。一兩泊之御積りにて御来遊、心神の御

保養被成候度願上候。好き同伴者あらば、御誘引もよろしくと奉存候。是非御待ち申上候。田楽の時候に相成申候間、田楽にても焼き申度と存候。先は御誘引迄に申上候。草々

三月二日 三溪  
川面老兄

59. 昭和十二年三月四日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 長岡 南風別荘 【裏】三月四日

拝啓 御答電報拝手、七日に御出被下候由に候得共、七日に御出にては当地着は十二時頃に相成可申、安静の時間殆んど無之候間、六日夜汽車にて沼津へ御出被成度。御迎ひ、さし出置候て不苦候。六日一泊、七日終日一泊、八日朝御帰りか。小生は八日午後帰り申度候間、午後なれば御同行出来可申候。六日夜汽車に御乗込、御勸申上候。尚、県氏なども御誘ひ被下候ても一層之事に奉存候。乍併、県氏も忙敷候間、二夜泊りは出来可申哉。若し二泊都合出来候得は御同伴此上もなく候。草々

三月四日 三溪  
川面様

60. 昭和十二年四月三日 紙本墨書(封書)

【表】

東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 三溪 【裏】四月七日  
昨夜は深更迄御引留め申上奉謝候。老生は目下、六、七両日間は差支無之候。

草々

四月三日 三溪

川面老生

【同封物】輯(試筆、四枚)

61. 昭和十二年五月十四日 紙本墨書(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 三溪 【裏】五月十四日

拝啓仕候。陳は過日御噂申上候墨龍屏風、相試候得共、大作は雲など如何にも困難にて、閉口仕候。未だ試作にて反古に過ぎざれども、一度老台之御批評相願、其上更に清書可仕と存居候。明後日曜に万一御寸閑なれば、御来駕願上度、然して御批評と助言とを伺申度と存候。大作の困難なる事、今更警(驚)カ)嘆仕候。雲には如何にも困難、結局成效六戸敷哉と悲観仕居候。拝顔之上。草々

62. 昭和十二年五月二十二日 鉛筆、紙(封緘葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 【裏】横浜 原三溪 五月

廿二日

拝啓 如貴説、其後一葉相試候処、好成绩を得不申、今日更に一葉相試申候。未だ完全には参り不申候得共、幾分かよろしく相成候と覚申候。尚、継続して勉強するに於ては将来、物に相成可申哉。就れにいたせ、明日、御来車一瞥御批評願度、今回の分は龍の体の形も老兄の御考の通りに書き申候間、是非御一覽被成下度候。明日夕方より、或る義太夫の天狗の希望にて、一段聞く事に相成居申候。老兄も御序に御静聴の一人に相加わり被下候得は、何

よりの功德かと存じ候。但し晚餐は小生より御馳走可仕候。御入来御待申上候。一兩日前森川氏参り、又更、出山釈迦、巻上げられ〔候〕。

63. 昭和十二年五月二十六日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 【裏】二十六日 原三溪

恭啓仕候。過日は御来車御助言、難有奉存候。貴説に力づけられ、更に処々改良仕、昨日にて完成仕候。先以て何とか見れる事に相成候哉存候。屏風は注文いたし置候。其内御序之節、更に御一覽相願度奉存候。向後虎は容易の方にては無之と存候。明日か明後日、田中、仰木の両氏、海老てんぶらの会に参られ可申候。万一県氏も参られ候様なれば、老台へも可申上と存居候。県氏参り不申候様なれば、不申上候事に可致と存候。草々  
二十六日

64. 昭和十二年六月三日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 三溪 【裏】六月三日

拝啓仕候。其後未だ動物園へは参りませんが、一応猛虎負嶋の図丈だけは書き申候。此は雲と比較すれば容易之事に存候。然し、御助言を請度き処も有之候。来る日曜にても御来遊被下ましく候哉。月曜日頃に動物園へ参り、虎実見仕度と存候。其前に一応助言御願申度、希望仕居候。草々  
六月三日 三溪

65. 昭和十二年七月十五日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五十 川面義雄様 横浜 三溪 【裏】十五日

美果拝戴、御礼申上候。炎暑如焚候。過日は電話行違ひ申候為め残念仕候。田中、県、中村氏、豊前氏などにて屏風感服会相開き、同時に手製の支那料理、此は屏風よりも何よりも好評に候ひし、来る十八日の日曜に御出被下候得は幸甚に候。画の持主の名前は悉く取調へ申候。書はまだ不明のもの沢山有之候。  
七月十五日

66. 昭和十二年八月十二日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 恵展 【裏】八月十二日 横浜 原三溪

恭啓仕候。一昨日送葬の際は炎熱之折、終日御立会、御懇情奉謝候。扱々人生之常態、不得止るぎ二有之、幸く御放念奉願上候。過日申上置候浄土飯、御供養之ぎ、来る十五日朝五時に御光臨御願申上度、小林先生、県君、前田青村（邨）君にも可申上候。恐入候得共、県君へ御打合せ被下度奉願候。此機会に於て衆菩薩の来光を得候事は故人に対する功德、不浅る事と奉存候。草々拜具  
八月十二日 三溪

川面老兄 梧右

67. 昭和十二年八月三十一日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 恵展 【裏】八月卅一日 横浜本牧町 原三溪

拝啓仕候。六合大塚氏迄、電話相尋可申候処、二、三日御出無之との事、多分御病氣にても無之哉と存候。心配仕居候。要件は甚御迷惑の次第に候得共、

此画三日、三溪画集を家内中にて閲覽仕居候処、何分にも第三卷の内にて、十三、四枚撤廢論盛に起り、仮令既に製本済に相成候とも、三卷丈々は、断然再検討して製本を改訂すべし、如何程の手数と冗費とを要するにもせよ、百年の悔を残すは不得策なりとの意見多く、小生も大に軟化仕候次第に候。

一度決定したるものを斯様の事申候は甚不徹底に候得共、一步を退て熟考すれば一時の事情や手数にて不満足のものを発表するも考へものに候間、小生も目下落城の体に候。此に付き至急御相談仕度、御病中なれば御来駕は御恢復之後にてよろしく、一時第三の製本文、中止御命し被下度候。第四と第五には一、二葉宛、不合格のものあれとも、此は一葉二葉の事に付、我慢可仕、則ち第四、第五は改正の必要無之、第三のみに御座候。右、不取敢要用迄申上候。就れ拝顔之上にいたし可申候。時下残暑甚敷候。御精養第一に奉存候。草々拝具

八月卅一日 三溪

川面老兄

68 昭和十二年カ九月四日 紙本墨書(封書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 惠展 【裏】九月四日 横浜 原三溪

拝啓 陳は昨日、黄蜀葵御送り申上候。御考如何哉申候。反対なれば写真御見合せ置被下度候。本日中村富次郎参り候に付、第三卷抜取りの分見せ候処、矢張り盆踊りは厳敷反対いたし候。斯様に周囲の反対を受候間、小生も思切り盆踊りは抜取りの事に決定仕候間、何卒抜取りの分に御加入置被下度候。十二天の画は本日始め可申積の処、来客にて筆取れ不申候間、明日試筆之積

に御座候。先は右迄々申上候。草々

九月四日 三溪

川面老兄

69 昭和十二年九月二十三日 紙本墨書(葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 九月廿三日 横浜 恭啓仕候。過日は御書面拜手仕候。近日中に御来訪被下候由之処、御来訪被下候なれば、二十五以後に願度候。明日は小生差支有之候間、万一御来訪被下候様なれば、二十五日以後御待申居候。三溪

70 昭和十二年十月六日 鉛筆、紙(葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 十月六日 拝啓仕候。陳は小生は来る九日は不在に付、万一御来車被下候様なれば、十日の日に御願申上度候。十二日も終日留守仕居候。念の為め一寸申上置候。草々拝具 三溪

71 昭和十二年十月七日 鉛筆、紙(葉書)

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 原三溪 拝啓 陳は来る十日午後、田中、県両氏及び尊台へ手製南京料理差上度候間、午後何時にても宜敷、御都合にて御来車被下度。尚、大塚氏も御同伴被下候得は一興に御座候。久敷同君快濶率直の高話、拝聴不仕候間、御繰合被下候得は幸甚に候。尤、食事は六時頃に候間、六時前なれば間に合ひ可申候。草々 十月七日

72. 昭和十二年十月十五日 鉛筆、紙（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 原三溪 【裏】十月十五日

御葉書〔面〕拝見仕候。御尊来之件、小生は明日明後日両日之内は、何時にてもよろしく候。しかし、半日位にては御付き不申哉と奉存候。或は両日御尊来を願申事に、相成可申哉と存候。先は拝顔之上可申候。草々

十月十五日 三溪

川面様

73. 昭和十二年十月十七日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 恵展 【裏】十月十七日夕 横浜 原三溪

御書面拝見仕候。序文挿入可能之由、拝誦仕候。就而は何卒全部御挿入之事、御奮発奉願候。さすれば、将来共三輯丈け送呈する場合も間に合ひ可申候。尚、東京にて冊中所蔵なき人へ進呈之分、鈴木氏、脇本氏、本山氏の外に、谷川徹三氏へ一部御進呈願度、此は和辻哲郎氏宅へ同時に御托し置奉願上候。徳富氏への書面、未だ認め不申不日相認め御送り可申上候。先は不取敢御返事迄申上候。草々 拝具

十月十七日 三溪

川面大兄

74. 昭和十二年十月二十日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 横浜 三溪 【裏】十月

二十日夜

過日は態々御来車奉謝候。其節和辻氏へ同時送本御願申置候。谷川徹三氏の住所は左記の通に付、何卒同氏方へ直接御送付御願申度候。

東京杉並区東田町一丁目五十七 谷川徹三

杉並区は遠方に付、和辻氏方にては迷惑に可有之候間、何卒直接御送付願上候。草々 三溪

75. 昭和十二年十月二十二日 紙本墨書（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 原三溪 【裏】十月廿二日 拝啓 陳は来る二十八日午後二時頃、松永氏、田中、南、仰木、中村諸氏参り被申、琳派作品展覧、其後例の支那料理を餐事可申候に付、何卒御来会被成下度奉願候。先は各御案内に申進候。草々 拝具

十月廿二日 三溪

川面様

76. 昭和十二年十一月三十日 紙本墨書（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 十一月卅日 拝啓仕候。此頃中旧里へ旅行仕居、両三日前帰宅仕候。扱其後画集に対する細評等も少々は参り居候間、御慰に御覧に入れ度、来る五日御寸閑も御座候得は御来遊御待申上候。就れ拝顔之上、万端可申上候。草々 三溪

77. 昭和十二年十二月十二日 鉛筆、紙（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 十二月十二日 横浜 原三溪



恭啓仕候。陳は歳末御多忙中に候得共、蓮華院にて孤燈静寂の境にて一度閑談仕度、小林、前田氏など招待仕置候。来る十五日夕方五時迄に、是非御来臨被下度候。万障一抛、御来駕願度候。満庭の落葉を踏んで一穂の青燈、一椀の茶、天地自ら主客一笑の中に御座候。

78. 昭和十二年十二月十六日 鉛筆、紙（葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 十六日 三溪

拝「啓」 夜前は快談愉快無限候。来る十九日午後、御来遊如何に候哉。此前余技帖之御相談仕度存居り候処、不得其機候。夫れ此れの為め御寸閑なれは御来遊奉願候。

79. 昭和十三年一月十二日 紙本墨書（封書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 惠展 【裏】一月十式日 横浜本牧町 原三溪

拝啓仕候。過日は御艸々奉謝候。扱、来十五日東劇之切符二葉買求め候得共、実は今回之劇は脚本も興味なく御迷惑とは存候得共、例により貴兄に御同伴を願ふより外に致方無之候間、何卒御繰合せ、同日四時迄に東劇へ御出向き奉願候。尤も、桃井、関、原等も参り居候。今回の分は猿之助の加納部隊長の最後と云ふを見たく、現今の戦争の模様の一斑を見申度迄の興味に御座候。切符封入仕候。御請取置奉願上候。草々拝具

一月十二日 三溪

川面老兄 梧右

80. 昭和十三年二月十日 鉛筆、紙（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 原三溪 【裏】二月十日

恭啓 陳は過日、小生老母郷里にて死去仕候為め帰郷仕、昨今帰港仕候。写真は全部出来之事に奉存候。来る十三日は多分在宅の積に付、御来車被下度候。余技写真に付、御打会可仕候。十四、五日には更に長岡へ参る積に候。今年には寒気甚敷候為めか兎角身体工合不宜仕、困却仕居候。余は拝顔之上可申上候。草々

二月十日 三溪

川面様

81. 昭和十三年三月十五日 鉛筆、紙（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 【裏】三月十五日

拝啓 逐日春暖に相成申候。過日は御来駕之処失礼仕候。以御蔭今日頃より床上に起き居申候。尚、過日之御願申候余技は格別急く訳には無之候得共、余り遷延仕らぬ様奉願、急ぐ事は無之候も遅れませぬ様奉願候。尚、当分は此地に在宅仕候。病氣は右之次第に付、以御蔭全快御安意、乍憚奉願候。草々十五日 三溪

82. 昭和十三年十一月一日 鉛筆、紙（封緘葉書）

【表】東京本郷区駒込千駄木町五〇 川面義雄様 【裏】十一月一日 三溪

恭啓 毎度御心配被下候老生病氣も遂に快方に相向申候。何卒御安心被下度奉願候。久敷振りにて、今月開場之歌舞伎座、観劇仕度存候。来る十五日、若し御差支無御座候得は、何卒御同伴奉願候。十五日、御差支無之候哉御伺

申候。先は右迄々。草々不一

十一月一日 三溪

川面様

83. 昭和十三年十二月十三日 紙本墨書(封書)

【表】東京本郷区駒込千駄木五〇 川面義雄様 惠展 【裏】十二月十三日 横浜 原三溪

拝啓仕候。寒氣相加申候処、倍御清健之事と奉賀候。扱、来十九日歌舞伎座にて菊五郎の熱演見物仕度候に付、御同行御願申度、別紙切符封入仕候。何卒御差支無之候得は、御奮発奉願候。先は当用迄申進候。草々

十三日 三溪

川面様

(執筆年不詳)

84. 七月二十八日 紙本墨書(封書)

【表】川面老兄 直披 【裏】七月廿八日 三溪

拝啓仕候。陳は小林君へ御願可申黄昏の幅、御請取被下、誠に御面倒恐縮に候得共、御願上候。宜敷願上候。其後、雪中桐の図、「見るに付け」段々、  
□趣き有之様に存候間、此も御序に黄昏の幅と共に小林君に御見せ被下度、万一小林君雪中の方所望せられ候様なれば、雪中の方表装可仕候。其上進呈可仕候。果又、両方共所望に候得は、両幅二幅対として差上候ても不苦候。雪中望みなき様子なれば、此は県氏へ差出し可申上候。宜敷奉願上候。草々

七月廿八日 三溪

川面大兄

尚、長谷川氏双幅、御序の折、御届け被下度願上候。当方にて入れ替へ可仕候。

85. 一月二十二日 紙本墨書(封書)

【表】川面老兄 惠展 【裏】別筒添 原三溪 一月廿二日

拝啓仕候。陳は別筒蛸子一葉相認め申候。此は野村氏の断有之候。写真御写しの上、御序て之折御返し被下度候。扱又、小生本日より長岡へ参り二十八日に帰港の予定に御座候。先は右迄々申上候。早々

一月廿二日 三溪

川面老兄

86. 二十五日 紙本墨書(封書)

【表】本郷区駒込千駄木五〇 川面義雄様 画幅添 【裏】廿五日 本牧町 原三溪

拝啓仕候。連日之雨天、御同困之至に奉存候。扱、過日御頼申上候、井上氏鴨河春暁は行違ひ、当方へ先方より送り越され候間、幸便御届け申上候。御落手被成下度候。御写しの上は、何卒貴方より先方へ御届け被下度奉願候。先方様の住所は、

麴町区下二番町七十四 井上治兵衛殿

に御座候。尚、過日之「書」写真、出来仕居候様なれば、此者へ御渡し被下度奉願候。草々

廿五日 三溪

川面老兄 机下

87. 十月十三日 紙本墨書（封書）

【表】川面義雄様 原三溪 別筒添付 【裏】十月十三日

拝啓仕候。秋晴御同快之至に奉存候。扱、鳥近雲雀鈍翁の一日三点抑々悦ひ差出し申候。尚、鳥近の箱の内に拙画二葉、此は大塚にて写真御採り被下度候。前三点其外拙画共、御あきの上は御返送奉願上候。早々

十月十三日 三溪

川面様

88. 六月五日 紙本墨書（封書）

【表】川面様 三溪 御披き 【裏】六月五日

拝啓 連日之霖天、御同困之事に奉存候。御使被下正に落掌仕候。ドーモ此は色摺でなくては取り不申候。別に若愚の二字と、富貴招月来の五、二之横物を御使に托し申候。此二字は一ページに「上下」二枚張りの御考にて、御撮影奉願候。富貴云々の横物は、一ページに一枚張りの積に御座候。日曜に御寸閑なれば、御来駕の時に乍恐縮御持参被下候得はよろしく候。草々

六月五日 三溪

川面様

89. 四月九日 紙本墨書（封書）

【表】川面様 三溪 当用

拝啓仕候。陳は写真の為め御□□□□為得申候。よろしく願上候。尚、画集は遂に終末に近づき、新規之分は今二枚にて切り上げ可申候。外に二枚計り別分書き直し有之候のみに相成申候。貴方色摺、尚拾枚近残し申候間、精々

御急き奉願候。いつれ拝顔之上可申上候。草々 三溪

川面様 四月九日

90. 二月二十三日 紙本墨書（封書）

【表】画三点添 川面義雄様 不要貴酬 【裏】横浜 原三溪

梅花之好時節と相成申候。本日一寸長岡迄参り可申候間、明日曜は不在に相成候に付、別筒春雨及読書二図差出し申候。着色御写取奉願上候。月末頃は帰宅可仕と存候。万事其折可申進候。早々拝具

二月廿三日 三溪

川面老兄

91. 二十九日 紙本墨書（封書）

【表】川面老台 待曹 【裏】原三溪 廿九日

歳末切迫、御多忙之御事に奉存候。過般、紅毛人来朝屏風御補習、非常の御努力にて一見旧態と存せず、殆んど再生之感有之候。感謝無限候。就は別封甚刻薄に候得共、感謝の微意を表する迄に御座候。幸に御突留被成下候得は大幸の至に奉存候。就、来場拝顔相楽居申候。早々頓首

廿九日 原三溪

川面老兄

92. 一月十二日 紙本墨書（封書）

【表】川面老台 恵展 【裏】三溪 正月十二日

恭啓仕候。陳は春來御発熱被成、御臥葺中之よし、大塚君より拝呈有之為、

御案し申上候。昨今如何に御座候哉。折柄寒氣甚敷候為め、御回復、一段手間取可申と暗勞仕居候。何卒充分御精養被成下度。旧臘余り御心勞の為めとも存候。此上にも御無理は被成間敷、御大切に願上候。此は例のホテルのスー  
プにて、清濁両様御座候。御用心被下候得は、仕合に奉存候。びんは冷蔵の内へ入れ、栓を抜きて置かれは三、四日は大丈夫に御座候。冷蔵に入れずば一昼夜位に御<sup>用</sup>□□<sup>ひ</sup>尽し願上候。新春「金山踊り」鳥追など浮世絵を試み申候。「御来車之節」御一覽奉願候。目下は鈍翁一日之巻物製作中に御座候。先は御見舞迄申上候。草々頓首

一月十二日 三溪

川面老兄

93. 二十七日 紙本墨書（封書）

【表】画一葉添 川面義雄様 親展 【裏】原三溪 二十七日  
拝啓 老母肖像及寒山二枚、何卒更に御撮影奉願上候。寒山は森川氏の布袋を落第いたさせ候報償として掲載可仕候。小生昨日帰港仕候得共、本日午後か明朝更に入函いたし、三十一日午前中に帰港可仕候に付、□□此両画は、万一、三十一日午後御来訪も相願候得は、其折御持参御願申度候。三十一日午後には可成御繰合せ御入来奉待候。草々

二十七日 三溪

川面大兄

94. 四月八日 紙本墨書（封書）

【表】画一葉添 川面義雄様 親展 【裏】原三溪 四月八日

恭啓仕候。過日は希代の木版拜見仕候。三溪老生、原本聊遜色有之事に覚申候。三溪集は、結局両大家の合作なりと三溪批評連は高唱仕居候。兎角も整版成候分は、一枚宛は小生手元にも置度候。一瞥之上直ちに御持帰りはあまり残酷に御座候。春圃耕作之図差出し申候。写真御取被下度候。来る十三日日曜日は外に外出可仕、留守に相成可申と存候間、御来車御見合奉願上候。御都合にて十二日夕方か或は十四日夕方に願上候。先は右迄申上候。早々頓首  
四月八日 三溪  
川面様

95. 十五日 紙本墨書（封書）

【表】画一葉添遣し置候 川面義雄様 恵展 【裏】十五日 横浜 三溪  
拝啓仕候。本日より二、三日南風村莊へ参り申し候。十八、九日頃には帰り可申候。此保津川山水、近頃得意の作に候。御批評奉願上候。尚、至急御撮影之上、雪中横物と共に御序の折、御返し奉願上候。先は拝顔之上、御物語申べく候。拜具  
十五日 三溪  
川面大人

此保津川は、善一郎に奪はれ申候。

96. 一月七日 紙本墨書（封書）

【表】東京駒込千駄木町五〇 川面義雄様 画筒添 【裏】昨夜帰り申候。  
十二日には御待ち申居候。一月十日朝 三溪 八日 原三溪  
恭啓仕候。陳は此頃中は御来車被成下、例により高談方言のみにて、何の御

かまひも不申上候。南風村莊も詰大家の逃散と共に、一層寂寥と感し申候。本日例の和田君へ差出し申候人物帖の内、無弦琴と白楽天、仏光とが余り貧弱に有之候為め、氣に成り居候間、早起改作に従事仕候。幾分か前作よりもよろしきかと存し候得共、貴君如何に候哉。無弦琴は是非共、此分と御取替へ願度、白楽天の方は和田君と御協議之上よろしき方を御取り被下度候。無弦琴は紙幅少し広く候。御如才は無之候得共、前回の方にて御切取り奉願上候。何卒和田君へ御持参之上、御相談奉願上候。先は右迄申上候。早々拝具

一月七日 三溪

川面老兄

尚、小生は尚二、三日、長岡に滞在之積に御座候。

〔別紙〕

再啓 尚、踊布袋、箱根道二葉封入仕候。誠に御面倒恐入候得共、何卒の例の経師屋にて裏打ちを御命し被下、其上写真御写し被下、御序の折御返送奉願上候。早々 三溪

八日 川面老兄

---

---

# Hara Sankei Letters from the Estate of Kawazura Yoshio: The Compilation of *Sankei-jō*, *Yogi*, *Sankei-gashū* and cultural exchanges in Hara's later years

KASHIWAGI Tomoh

Woodblock print artist and expert copyist of Japanese ancient paintings Kawazura Yoshio (1880-1963) was born in Usa, Oita prefecture. After graduating from the Tokyo School of Fine Arts in 1904, he was employed by art book publisher Shinbishoin as a technical expert assigned to reproduce antique paintings. His projects included color woodblock reproductions of various types of antique paintings, such as the *Ukiyoe-ha gashū* (Schools of Ukiyo-e Collection; November, 1907), the *Tōyō bijutsu taikan* (General Survey of Oriental Art; August, 1908), and later the *Scrolls of the Tale of Genji* (National Treasure, The Tokugawa Art Museum), the *Heron* by Tan'an Chiden, and the *Ancient Sutra Manuscripts on Fans* (National Treasure, Osaka Shitennōji Temple). Kawazura was regarded highly as the leading technician of expert reproduction in woodblock. From around 1912 until the 1930s, he engaged in reproducing the antique art owned by Hara Sankei and consequently compiling the *Sankei-jō* (catalogue raisonné of the Sankei collection), publishing the *Yogi* (Recreational paintings and calligraphy by historical figures from the Sankei collection), and compiling and distributing the *Sankei gashū* (Selected paintings, drawings, and calligraphy by Hara Sankei). He and Hara Sankei were intimate friends from the early 20<sup>th</sup> century through the pre-war years until Hara's death.

The letters reprinted in this bulletin are being presented to the public for the first time. After Kawazura's death, Funahashi Mitsuru, a student of Kawazura, organized the documents including these letters that Horiuchi Michio, Kawazura's cousin, later inherited from Funahashi. The documents were donated to the Yokohama Museum of Art after having been kept in Horiuchi's home for many years. In addition to the Sankei letters, there are also letters of Nihonga artist Kobayashi Kokei, art historian Yashiro Yukio, scholar of ancient texts Tanaka Shinbi, and businessman art collector and tea connoisseur Takahashi Yoshio (Sōan).

This report introduces 96 reprinted letters written by Hara Sankei, with detailed annotation. Interpretation and analysis of these letters is necessary in order to understand the deep meanings of the *Sankei-jō* and the *Yogi* compilation. These, as well as the *Sankei-gashū* which is regarded as a survey of Sankei's own artistic achievements, attest to Hara's research in ancient arts in his later years. The letters further give evidence of Hara Sankei's interaction with cultural figures of his time.